

ルカによる福音書4章「イエスの宣教の始まり」

1A 悪魔の誘惑 1-13

2A 恵みの解放 14-30

3A 教えの権威 31-44

本文

ルカによる福音書4章を開いてください。私たちは前回、バプテスマのヨハネがイエス様のことを「私よりもさらに力のある方がおいでになります。(3:16)」と発言したのを読みました。そしてイエス様がヨルダン川にいられて、バプテスマを受けられた時に、天から父が、鳩のような形の聖霊が下られた後で、「あなたは、わたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。(3:22)」と言われたのを読みました。イエス様は、神の御子であられ、御霊に満たされ、力ある方であることが紹介されました。

そしてイエス様は、宣教の働きを始められるのですが、ルカによる福音書において特徴的なのは、その話に入る前にイエス様の系図を紹介していることです。その系図が非常に興味深く、マリヤに至る系図であることです。そしてマタイによる福音書にある系図と異なり、その系図がなんとアダムにまで至っています。そしてアダムは「神の子(38節)」と紹介されているのです。

イエス様とアダムのどちらもが「神の子」と呼ばれていますが、もちろん大きな違いがあります。イエス様は永遠の昔から父なる神と共におられた方であり、神ご自身、創造主であられますが、父のものを相続している方としての神の御子です。けれどもアダムは、神に造られた、ご自分のかたちに似せて造られた人としての、神の子であります。しかしながら、ルカはイエス様が、人として来られたことによって、ご自身が第二のアダムになったことを強調しています。アダムが罪を犯したため損なってしまった神のご目的を、イエスにあって回復することをルカは描いています。

1A 悪魔の誘惑 1-13

そこで、イエス様がバプテスマを受けられてから、すぐに荒野で悪魔の誘惑を受けられたということも、その誘惑の中に私たちの希望があるということです。私たちが誘惑を受ける時に、人となられたイエスが悪魔に立ち向かい、悪魔が退いたということで、私たちにもイエス様の憐れみによって、その力が与えられているということです。

4:1 さて、聖霊に満ちたイエスは、ヨルダンから帰られた。そして御霊に導かれて荒野におり、4:2 四十日間、悪魔の試みに会われた。その間何も食わず、その時が終わると、空腹を覚えられた。

イエス様が宣教の働きを始められるにあたって、初めに行われた働きは誘惑を受けられたことです。ここで、聖霊に満たされたイエスが、御霊に導かれて荒野に連れていかれていることに注目し

てください。私たち人間が誘惑を受ける時は、それは神からのものではなく、自分の欲に引かれるものであることを知っています。「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。(ヤコブ 1:13-14)」しかし、イエス様は先のバプテスマと同じように、肉のうちにいる弱い私たちと一つになるために、神の御心によって悪魔の誘惑を受けられました。

所は、ヨルダン川から上がられて、すぐそばにあるユダの荒野です。エリコのそばに「誘惑の山」と呼ばれる、伝承としてイエスが誘惑を受けられた所だと言われている場所があります。イスラエルの民がヨルダン川を渡り、それからエリコという町に入って神の戦いを戦いましたが、イエス様はこの地上において、反対する勢力との戦いの中で神の御国を広めていかねばなりません。

そして四十日間の断食です。四十日は、神のご計画の中で試す時、裁く時の期間でありました。ノアの時の洪水では四十日間の雨、イスラエルの荒野での放浪は四十年間でありました。イエス様も、父なる神に仕える僕としての試みをこの期間を経て誘惑を受けられます。

4:3 そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。」4:4 イエスは答えられた。「人はパンだけで生きるのではない。」と書いてある。」

ここで「あなたが神の子なら」と言っていますが、これは仮に、という意味ではなく、「あなたが神の子であるのだから」に近い意味合いです。悪魔は神の子であることを知っています。ですから、石をパンにすることは可能なのです。先ほど、バプテスマのヨハネが「さらに力のある方」と宣言し、父なる神ご自身が、「これは愛するわたしの子」と言われた、その御子の力はそこにある石をパンにすることは可能でした。

しかし、イエスはそれを行われません。ご自分の力を自分の肉の欲のために使うという誘惑を、悪魔は行っているからです。ここで思い出していただきたいのは、アダムが失敗した時のエバに対して行なった蛇の誘惑です。「女が見ると、その木は、まことに食べるのによく(創世記 3:6)」とありました。これは、自分の持っているものを自分の欲望のために用いるという肉の欲であります。私たちはこの分野でことごとく失敗しました。しかし、イエスは打ち勝たれたのです。

4:5 また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、4:6 こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。4:7 ですから、もしあなたが私を拝むなら、すべてをあなたのものとしましょう。」

国々のいっさいの権力と栄光が、悪魔に任されているということですが、これに対し、イエスは

何の反論もされていません。なぜなら、それは真実だからです。神はアダムに地を従わせるようにされましたが、アダムが罪を犯したので、それは悪魔の手に渡されました。それで悪魔は、他の箇所「この世の神」と呼ばれています。イエスは、この世界を悪魔から神にお返しするため、つまりこの世界を贖うために来られました。ですから、「差し上げましょう」という悪魔の声は、イエスにとって大きな誘惑だったのです。これは、使徒ヨハネが、「暮し向きの自慢(Iヨハネ 2:16) 」と呼んでいる、この世の欲の一つです。自分に権力と栄光を引き寄せることであります。エバが悪魔から誘惑を受けたとき、「神のようになり、賢くする」という木は、いかにも好ましかった、と書かれています。イエスも同じ誘惑をお受けになりましたが、次を見てください。

4:8 イエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい。』と書いてある。」

再び、イエスは申命記を引用されました。神にのみに仕えて、主にだけ仕えるということです。神のみこころは、そのひとり子が人と同じ姿をとって、人々の弱さをにない、最後は十字架につけられることです。十字架への道を通らなければいけないのに、悪魔はそれを通らなくても、目的のものをあげるよ、と囁いているのです。

4:9 また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の頂に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。4:10 『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる。』」とも、4:11 『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささえさせる。』」とも書いてあるからです。」4:12 するとイエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』と言われている。」

イエスが、神のみことばを用いるので、悪魔も使い始めました。悪魔が神のみことばを歪曲するときに、異端が生まれます。そして、神殿の頂から飛び降りることは、目の欲に訴えています。自分がこんな高いところから飛び降りても、浮き上がるのを見てみたい、というのです。エバも、同じ種類の誘惑を受けており、「その木は、目に美しく」と書かれています。けれども、自分の欲のために神の約束を試すことをされませんでした。

4:13 誘惑の手を尽くしたあとで、悪魔はしばらくの間イエスから離れた。

悪魔は、イエスから離れました。イエスが貫かれたことは、基本的に、自分に仕えるのではなく、神に仕えるということです。神の御子としての力は、決して自分のために用いるのではなく、父なる神のために用いるためにあります。

ところで、悪魔は、「しばらくの間」イエスから離れた、とあります。彼のイエスに対する攻撃は、これからの宣教で数々の悪霊との遭遇、そして十字架に至るまで続きます。ゲッセマネの園におけ

る祈りは、まさに壮絶な霊の戦いでした。イエスが十字架の上で死なれて日目によみがえることによって、悪魔は完全に敗北しました。今は、彼は、イエスの御名を聞くと、恐れて逃げなければならないのです。

2A 恵みの解放 14-30

4:14 イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が回り一帯に、くまなく広まった。4:15 イエスは、彼らの会堂で教え、みなの人にあがめられた。

イエスは、ガリラヤ地方のシナゴークで、人々に教え始められました。ラビとして教えられ始めたのです。イエスは、ご自分ではなく、神にお仕えすることを貫かれましたが、神への奉仕は、人々への奉仕につながります。人々を教えて、人々の必要を満たすことに、イエスは専念されました。そして、その教えのゆえに、イエスはあがめられました。「このユダヤ人教師の話は、すごい。みんな聞きに行こう。」というような、期待感がみなの中に広まったのです。

4:16 それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。

イエスが会堂に入って教えられたのは、いつものとおりのことでありました。ナザレの人々にとって、イエスは見慣れた人であり、イエスが朗読するのも見慣れた光景だったのです。

4:17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。4:18 「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、4:19 主の恵みの年を告げ知らせるために。」4:20 イエスは書を巻き、係の者に渡してすわられた。会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた。4:21 イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」

つまり、イエスは、この預言の「わたしは」はご自分のことであることを話しています。主の御霊がイエスの上におられて、そして貧しい人に福音を伝えるように遣わされました。貧しい人に対する福音、あるいは良い知らせとは何でしょうか。貧しいとは、経済的な貧しさだけでなく、精神的な貧しさ、霊的な貧しさも含みます。必要を感じていて、欠乏しており、自分のいたらなさを感じている人々のことであります。そうした人たちの必要が満たされること、豊かにされることが良い知らせであり、福音です。イエスが神から遣わされたのは、まさにこの理由からです。そのために、ヨセフという普通の家庭にお生まれになり、そして、人としての誘惑をお受けになりました。そして、貧しい人々への福音として、具体的に、捕らわれている人に赦免が、盲人が目を開き、しいたげられている人々が自由になります。そして、それは、「主の恵みの年」であります。新しい年です。いろいろ

な意味で束縛されていて、暗やみの中にいた人間の世界に、神が介入されます。そして、人々のうちに、神の新しい働きが始まるのです。その新年が、今日、始まりました、とイエスは言われているのです。

4:22 みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか。」と彼らは言った。

人々は、イエスが非常に恵み深い説教をされたことに、驚きました。教師として彼を認めましたが、しかし、イエスを「ヨセフの子ではないか。」と言って見下しています。私たちは前回、バプテスマのヨハネが人々の人気を得たが、イエスはそうでなかったことを学びました。それは、くり返しますが、私たち人間の日常生活の真中に、福音が行き届き、私たちがそこで変えられて行くためであります。イエスは、目の見張るような場所に存在してはおらず、私たちの日常生活の、しかも暗やみの部分に存在されているのです。そして、その部分が変えられることによって、私たちは本当に喜ぶことができます。でも、私たちは、そうした核心部分に触れられるのを嫌がり、いつまでも同じままでいたいと願っています。ナザレの人々が、「ヨセフの子ではないか。」と言ったように、古いものに固執しようとし、「あなたは変わります、神は新しく働かれます。」というメッセージを受けても、「いや、今まではこうだったから、そんなことは無理でしょう。」と言って、不信仰に陥っているのです。

4:23 イエスは言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ。自分を直せ。』というたとえを引いて、カペナウムで行なわれたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう。」

これは、自分は神に仕えたくないが、祝福はもらいたい、という態度です。俗に言う神頼みです。「自分を直せ」と言っているように、非常に自己中心的です。自分の必要が満たされることを求めているのではなく、自分の欲が満たされるのを求めています。エジプトの王、パロも、同じことを言いました。「かえるを私と私の民のところから除くように、主に祈れ。」と言いましたが、モーセが祈ってかえるが取り除かれると、再び心をかたくなにしました。なぜなら、神を信じることはできないというのは言い訳にしかすぎなく、私は、自分のために生きており、神には仕えないと心に決めているからです。

4:24 また、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません。4:25 わたしが言うのは真実のことです。エリヤの時代に、三年六か月の間天が閉じて、全国に大ききんが起こったとき、イスラエルにもやもめは多くいたが、4:26 エリヤはだれのところにも遣わされず、シドンのサレプタにいたやもめ女にだけ遣わされたのです。4:27 また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、らい病人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

イスラエルのために神から遣わされた預言者が、異邦人のところに行って、異邦人がその便益

を受けました。なぜなら、イスラエルの民が心をかたくなにしていたので、エリヤもエリシャも受け入れなかったからです。

4:28 これらのことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、4:29 立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。4:30 しかしイエスは、彼らの真中を通り抜けて、行ってしまわれた。

彼らは、怒り狂いました。イエスを殺そうとさえしました。なぜ、そこまで怒ったかと言いますと、預言者が異邦人に遣わされたことを聞いたからです。ユダヤ人は、自分の民族に誇りを持っています。そして、異邦人は、地獄の火の燃料のために造られたぐらいにしか考えていませんでした。非常に軽蔑していたのです。それで、怒り狂いました。民族に限らず、肉の誇りは、福音に真っ向から対立します。それで、真実を示されたとき、ものすごい怒りや落ち込みが生じます。パウロは、「肉の思いは神に対して反抗するものだからです。(ローマ 8:7)」と言いました。私たちが肉の思いから解放される方法は、十字架につけられたキリストを見ることです。同じくパウロは、「しかし私たちには、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。(ガラテヤ 6:14)」と言いました。

イエスは、彼らが投げ落とそうとするのを見事に避けることができました。悪魔は、御使いがあなたを守らせる、あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らがあなたをささえる、という聖書のことばを引用しましたが、皮肉なことに、今ここで、それが実現しています。イエスにはすべきことがまだたくさんあったので、神はこのようにして、イエスを生かしてくださったのです。

3A 教えの権威 31-44

4:31 それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして、安息日ごとに、人々を教えられた。4:32 人々は、その教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

場所は、ガリラヤ湖畔の町カペナウムです。ここにいる人々は、ナザレの人々とは異なり、イエスの教えの権威を認めました。イエスは、ふつうに、ラビとして教えを垂れましたが、それでもそのことばに権威があることを認めたのです。ここに、福音を受け入れる貧しい人々の姿が描かれています。それは、教えの権威を認めることです。聖書のことばが真理であると認めて、それを自分の生活の権威としても認めます。励ましのみことばを読んだら励まされ、慰めのことばを聞いたら慰められ、訓戒のことばを聞いたら、心痛めて悔い改めるような態度です。みことばを自分で納得するよりも、みことばに支配されることを選ぶ人々であります。そうした人に、主の恵みがとどまるのです。

4:33 また、会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいて、大声でわめいた。4:34 「ああ、ナザレ人のイエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私

はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

イエスが神の子であることを悪霊が話し出しました。

4:35 イエスは彼をしかって、「黙れ。その人から出て行け。」と言われた。するとその悪霊は人々の真中で、その人を投げ倒して出て行ったが、その人は別に何の害も受けなかった。4:36 人々はみな驚いて、互いに話し合った。「今のおことばはどうだ。権威と力とでお命じになったので、汚れた霊でも出て行ったのだ。」4:37 こうしてイエスのうわさは、回りの地方の至る所に広まった。

人々は、イエスのことばに、悪霊を制する力があることを認めました。悪霊に対して、イエスが力のあることを認めました。つまり、イエスの教えだけではなく、イエスの行われるわざに権威を認めたのです。これも、福音を受ける貧しい人の姿です。自分の生活に、人生に、イエスが新しい働きをされることを認めます。受け入れます。自分がイエスによって変化することを願います。

4:38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家にはいられた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスにお願いした。4:39 イエスがその枕もとに来て、熱をしっかりとつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた。

熱をしっかりとつけておられます。イエスは、悪霊のときと同じように、ご自分のことばでもって力を示されました。こうして、悪霊だけでなく、病に対してもイエスが権威を持っておられることがわかります。悪霊は目に見えないことではありますが、病は肉体的なことです。私たちは、目に見えないことに対しては信仰を持ちやすいのですが、目に見えることについては、不信仰になりがちです。しかし、その分野においてもイエスの権威を認めるのが、貧しい者の姿です。

4:40 日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。4:41 また、悪霊どもも、「あなたこそ神の子です。」と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。彼らはイエスがキリストであることを知っていたからである。

今度は、イエスはひとりひとりに手を置かれています。イエスは、個人個人にふれられたのです。同じように、私たちにひとりひとりにも手をふれてくださいます。「あの人にはそうかもしれないが、私は違う。」ではないのです。自分のその独特の状況の中にイエスはおられて、そして、そこで働かれるのです。個人に対するイエスの権威を認めることも、貧しい者の姿です。

悪霊は、またイエスを、神の子キリストであると叫びました。彼らは知っていたのですが、民衆は知らなかったのです。しかし、イエスは、まだ民衆には知られないようにされました。それは、知ら

れるようになる時が神によって定められていることでもあります。イエスの人々に対する配慮もあります。イエスは、無理強いて人々を信じさせることをされませんでした。少しずつ、ご自分はだれなのかを示されたのです。彼らの能力に合わせて、彼らが福音として受け入れられるところから奉仕を始められたのです。相手の人格を認めたミニストリーを行われました。

4:42 朝になって、イエスは寂しい所に出て行かれた。群衆は、イエスを捜し回って、みもとに来ると、イエスが自分たちから離れて行かないよう引き止めておこうとした。4:43 しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」4:44 そしてユダヤの諸会堂で、福音を告げ知らせておられた。

群衆は、イエスがいっしょにおられることを強く望みました。イエスがともにおられることによって、自分たちが自由になることを知っていました。イエスの臨在に、力があり、権威があることを認めたのです。私たちは、イエスの教えと、わざだけでなく、イエスがともにおられることを認めることによって、福音を受け取ることができます。いつでもイエスがともにおられることを知っていることが、貧しい者の姿です。

イエスは、一定の人々だけでなく、なるべく多くの人々にこの福音を宣べ伝えようとされました。なぜなら、イエスはすべての人の救い主だからです。私たちは、そのように認めているでしょうか。自分に関係のある人たちだけの救い主ではなく、この地域の人々、この国、そして世界中の人々の救い主なのです。それが宣教への思いになります。

こうして、イエスはガリラヤの至るところで、福音を告げ知らせておられました。イエスの願いは、全世界で福音が告げ知らされることです。カペナウムで力強く働かれたイエスは、ここにも生きておられます。まず、私たちひとりひとりの心の中を点検して、自分がナザレの人ようになっていないか調べてみましょう。そして、キリストの新しい働きを、神の恵みの年を受け入れて、カペナウムの人々のようにしましょう。イエスは、貧しい者に福音を告げ知らせておられるのです。